

「痛み」を重ねながら ～差別の問題を自分のこととして～

「こんな混んでいるときにわざわざ来なくてもいいのに」

ある年の正月のことでした。車いすを利用していた父を連れて、近くの神社へ母と妹と私で初詣に行きました。神社には3段ほどの石段があり、父の乗った車いすは重く3人では持ち上げることができませんでした。そこで、私たちが、参拝客へ「誰か車いすを抱えるのを手伝ってもらえませんか」と声をかけたとき、冒頭の言葉が突然父に浴びせられました。

父のこと

父は、50代半ばに、「*脊髄小脳変性症」という病に冒されました。運動機能が次第に麻痺し、リハビリのため入院をしました。

入院して半年以上が経ち、外泊が初めて許されました。父は、家に戻って来るのを楽しみにしていました。そんな思いで出かけた初詣で浴びた予期せぬ言葉に、父は何も言わず、参拝もせず、そのまま家に帰って行きました。この日以来、病院から家に戻ってきても、父が外に出ることはありませんでした。そして、5年後、病気が進行し、亡くなりました。



「痛み」への共感

今思えば、病気の宣告を受けてしばらくの間は、私も変わっていく父を受け入れることができませんでした。凜として歩いていた父が、病気を患ってからは車いすがないと移動することもできなくなり、ベッドから車いすに乗せるだけでも大変でした。思うように言葉が出せなくなった父に対して、私も、冷たい言葉を何度も浴びせてしまいました。

しかし、初詣で「こんな混んでいるときにわざわざ来なくてもいいのに」という言葉を直接聞き、「どうしてそんなことを言うんだ」と思いました。参拝しようともせず帰って行く父の背中から、父の苦しさ、悲しさ、憤りが伝わりと同時に、わが身をしめつけられるような自責の念にかられました。「差別」の問題を初めて自分のこととして感じ、その「痛み」を自分のこととして考えることができた瞬間でした。

この出来事以降、私は、父の姿をありのままに受け入れることができるようになったと感じます。「何を言っているのかさっぱり分からん」と突き放していた父の言葉をしっかり聞こうとするようになり、父のことを考えながら車いすを押すようになりました。父のおかげで少しは優しくなれたように思います。

「嫌だなあ」という思いやなかなか人には伝えにくい辛さは、誰もがもっていることでしょう。「差別」の問題に出会ったとき、当事者の思いに自分の「痛み」を重ね合わせることで、初めて「差別」が自分の問題になるのだと思います。そして、「痛み」に共感できる自分を感じたとき、以前よりも豊かな「自分」と出会い直せる、そんな気がします。

*脊髄小脳変性症…小脳や脊髄が障がいを受けることから、歩行時のふらつき、手の震え、思ったように言葉が出ないなどの症状が出現する。日本において難病指定を受けている疾患の1つ。